

---

# 孤独な僕に舞い降りた孤独な神様

HERON

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

孤独な僕に舞い降りた孤独な神様

### 【Nコード】

N5654E

### 【作者名】

HERON

### 【あらすじ】

これは、彼の昔々のお話です。そう。孤独だったあの頃の……

これは、彼の昔々のお話です。そう。孤独だったあの頃の……

彼が幼い頃、彼はとても幸せでした。自分の成長を喜ぶ家族がいて、一緒に遊ぶ友達がいて。

夜になると、ホカホカでおいしいご飯があつて、寝るためのベッドがありました……

しかし、幸せなんてそう長く続くものではありません。彼の母が病死したことにより、幸せの歯車はあらぬ方向へ向きを変え、狂い始めていきました。

あんなに優しくて頼りがいのある父が、酒に溺れ、自分に暴力を振るい、あげくの果てには自分を捨てたのです。

彼が父に捨てられた事実は瞬く間に町に広がり、彼と一緒に遊んでいた友達も、もう、彼に近寄ろうともしません。

彼はもう、一人です。自分の成長を喜ぶ家族もいません。一緒に遊ぶ友達もいません。

夜になつても、ホカホカでおいしいご飯も、寝るためのベッドもありません。

もう、あのときのような幸せは崩れ去ったのです。

それでも彼は、孤独な中、生き続けました。もう何年過ぎたかも分かりません。服だつてもうボロボロです。

そんな彼の日課は、毎晩毎晩、色々な人の家の中を窓の外から見続けることです。

窓の外からいくら色々な人の家の中を見たって、窓を開けてくれる人なんて一人もいません。

そんなことは彼にも分かっていた。しかし、信じたかったです。羨ましかったのです。自分もいつか、窓の先のような幸せを取り戻せると……信じたかったです……

そんな毎日を送る彼。もう、あのような幸せは訪れないのでしょうか。

いいえ。そんなことはありません。孤独に耐え、何年もの間、幸せを願いつけてきた彼に幸せが訪れないはずがない。

そう。人生の転機は突然やってくる。何の予兆もなく、突然に……

「孤独は寂しいか？ もし、私のような得体の知れないものが突然、お前の前に現れても、お前は喜ぶか？」

彼の頭の中に響く声。彼は驚き、後ろをパツと振り向いた先には、見たこともない……正に得体の知れないものが彼の瞳に映りこみました。

彼の瞳に映りこんだその得体の知れないもの。なんといえいいんでしょう。

透明な何かに白い布を被せたようなその姿。目と口は、大雑把に目と口の形に布が切られているので、かるうじて分かります。

「うん。喜ぶよ。とっても嬉しい」

彼が得体の知れないものを見て、笑顔でそう言葉を返す。得体の知れないものは、彼の反応に驚いた様子。

「お前……私を見て、恐怖を感じないのか？　こんな生物みたことないだろう？　なぜ、私に笑顔で接する？　私は今までこの姿を見て逃げていった人間を沢山見てきたというのに……」

「恐怖なんて一つも感じないよ。だって、僕に話しかけてくれる人なんていなかったんだもの。久しぶりに言葉を口に出せて、とても嬉しいんだ。むしろ、もっと沢山、お話したいなあ……なんて」

どうでしょう。彼は怖がるどころか、逆にもっと話がしたいと、得体の知れないものに頼みました。

得体の知れないものは更に驚きます。これは今までにはないケースだったのですから。

「わ……私も、お前ともっと話したい。わ……私と、その……友達になつてはもらえないだろうか？」

「こんな僕でいいの？　僕と友達になってくれるの？　本当にいいの？　嬉しい。凄く嬉しい！　僕、グリユっていうんだ。あなたはなんて名前なの？」

グリユのテンションは最高潮です。

それもそのはず。何年もこの光景を信じ続けてきたのですから。

ちなみに、得体の知れないものは、町歩く人々には姿が見えていません。なので、町歩く人々は、突然、大声を上げたグリユに目がいきます。人の瞳にクッキリとグリユの姿が映るのも、久しぶりのことです。

「私の名前は……私の名前……実はないんだ。私は孤独の神様でな。孤独に生きる人に幸せや勇気を与えるのが仕事のはずだったんだが、見ての通りこの姿だ。みんな逃げていってしまう。始めは仕事とし

て幸せや勇気を与えようとしていたよ。でも、次第に私自身も孤独になってしまった。今では、仕事としてではなく、本気で誰かと友達になりたいのだ。そして、勇気を与え、私も勇気をもらいたかった。そんなときに現れてくれたのがグリユだ。グリユはグリユといういい名前をもっている。しかし、私には名前もない……」

「あるよ神様。神様っていういい名前があるじゃない。神様は僕に勇気くれたよ。誰がなんといおうと、神様は僕の神様だ。なんだかごちゃごちゃになっちゃうけど、神様は僕の神様なんだ！」

こうして、孤独の神様には神様という名前が名づけられました。

もう、グリユは孤独じゃない。神様だって孤独じゃない。グリユと神様はもう友達です。苦しみを喜びを感動を分かち合える友達なのです。

ほら、もう歩きながら喋っています。グリユの人生。神様の人生。それぞれの人生を話し合える仲なのです。

今日も、明日も、明後日も、二人は話し続けます。グリユが孤独な人生の中で見つけてきた秘密の場所だって教えてあげます。神様も嬉しそうにグリユの話を聞き、秘密の場所に驚きます。

ようやくです。どれぐらい過ぎたか分からない年月をかけて、あらぬ方向へ向きを変え、狂っていた幸せの歯車が、ようやく正常に動き始めました。

二人は今日も、グリユが見つけた秘密の場所で夕食の調達。

そこは人気の無さそうな森で、木に生っている果物は、誰の手にも触れられることなく無数に生っています。正に、グリユだけの果物。秘密の場所なのです。

木に生っている果物を取り、おいしそうに食べるグリユ。それを見つめる神様。

ジッと果物を見つめている神様に気づいたグリユ。「食べてみる？」と一つ果物を神様に差し出しました。

しかし、神様は果物を食べることは出来ないで「私は神様なので食べることは出来ない」と断りました。そして、ハハハと笑いしました。

そんな他愛もない会話がとても楽しいのです。今まで孤独に生きてきたグリユと神様にとっては、他の誰よりも楽しいのです。

しかし、人生は残酷なもの。一度狂った歯車は二度だって狂います。

なんと、森が何者かの手によって燃やされ、森が炎で包まれました。

急いでその場から逃げるグリユと神様。幸い、それ程、森の深いところまで足を進めていなかったため、十分逃げ切れると思いました。しかし、アクシデントは続きます。

なんと、グリユと神様の瞳に、炎に包まれた森で倒れている少女の姿が映ったのです。

グリユと神様は、一瞬、少女を助けるべきかどうか悩みました。しかし、それは一瞬のこと。グリユと神様は、アイコンタクトをとるように目を合わせると、一目散に少女の下へ走りしました。

炎の中をかくぐり、倒れている少女を抱え、また、森の外へと走り出すグリユと神様。

体も顔も黒焦げになり、ボロボロだった服も更にボロボロに。

しかし、グリユと神様と少女は生き延びました。そして、メラメラと燃える秘密の場所を見て、涙をこぼしました。

しばらくして、目を覚ました少女。すぐに、燃え盛る炎の中から助けてもらったんだと察知し、グリユにお礼をいいました。

その後、グリユは「ちゃんとしたお礼がしたいので、家に来てください」と言われます。

グリユは答えに戸惑いました。しかし、神様が「行くべきだ」と言うので着いていくことに決めます。

少女に着いていったその先は、グリユが見たこともないような大きな家。

少女が家の前に立つと、ボディーガードらしき人物が少女の前に群がり、何かひそひそ話をしています。

しばらくして、グリユの前に帰ってきた少女が、笑顔で「入って」と言いました。

中に入ると、少女の母らしき人物が現れ、グリユに何度も何度もお礼をいいます。

グリユも照れながら応対していると、少女がビックリするような発言をします。

「お母様。私、この人と一緒に暮らしたい。この人とこの家で一緒に住みたい」

これには、グリユも、少女の母も、神様だつて驚きました。

しかし、これはグリユの幸せでもあります。新しい家族が出来るのです。成長を喜んでくれる家族ができます。ホカホカなご飯も寝るためのベッドもあることでしょう。グリユにとって幸せの訪れと

いつでも過言ではありません。

しかし、それは孤独だった頃のグリユの話。今は、神様がいます。グリユは神様と一緒になら……という思いに変化しているのです。

「そ……それは、私にとっても願ってもないことだけど、この方にも家族がいらっしゃるのよ。無理を言っではいけません！」

少女の母が少女を叱り付けます。しかし、少女の母は気づきました。家族という言葉を自分が発言したとき、グリユの顔が落ち込んでいたことを。家族がないということを……

「あつ……もしよかったら、ここで一緒に暮らしてもいいのよ。大歓迎だわ。ねえ。ベル？」

「うん！ 私大歓迎。一緒に暮らそう？ いいでしょ！？」

ベルの母の許しをもらったベルが元気よくグリユに尋ねます。しかし、グリユは迷ってしまうのです。この家に住むことにより、神様と話す時間がなくなってしまうのではないかと。

「神様もいいかな？ 実はね。僕の隣に神様っていう神様がいます。とても話しやすくて楽しいんだ。僕にとつての神様なんだ神様は。いいでしょ？」

とうとう、グリユの頭は混乱を極めました。もう、自分が何を言っているのか分からない。

ベルもベルの母も、煙を吸いすぎたんだと、大慌てでグリユをベッドに運ぶ準備を始めます。

それでも、グリユは神様の話を話し続けました。頭が混乱していても、グリユは神様のことだけは、はつきりと覚えている。

しかし、これではグリユが変人として扱われ、ベルとベルの母に気味悪がられるかもしれない。もしかすると、やっと掴んだ幸せが一瞬にして崩れ去ってしまうかもしれない。

神様はそう思いました。神様の事を最も心配しているのがグリユのように、グリユの事を最も心配しているのは神様なのです。

神様は覚悟を決めて決心しました。神様には勇気があります。グリユにもらった勇気があるのです。振り絞るような声でグリユの耳元で囁きます。

「ありがとうございます。グリユのお陰で私は孤独ではなくなりました。勇気だって楽しさだって何だってもらった。私は幸せになれたんだ。でも、私のせいでグリユの幸せが崩れてしまう。それは駄目なことだ。だから、私は孤独に戻るよ。だって、私は孤独の神様だからね。孤独な人をもっと幸せにしないといけない。だから、グリユは私のことを忘れるんだ。そして、この家で幸せな生活を送るんだ。じゃあ、私はそろそろ行く事にするよ。グリユと過ごした生活。最高に幸せだった。ありがとうございます。そしてさようなら」

神様は、そう言った後、グリユに呪文を唱えました。

それは、グリユが自分の全ての記憶を忘れる呪文。

神様が呪文を唱え終わると、グリユは気を失いました。

しばらくして、目を覚ますグリユ。しかし、目を覚ましたグリユには、神様と過ごした全ての時間の記憶がありません。もう、グリユの記憶から神様は消え去ったのです。

グリユはその後、ベルと結婚し、幸せな生活を送っています。

神様はというと、今も孤独の神様として、孤独に生きる人に幸せや勇気を与えようと頑張っています。しかし、グリユのような人はおらず、みんな神様の姿を見て逃げてしまいます。

でも、神様はへこたれません。神様はこんなとき、グリユの姿を思い出すのです。

グリユのように自分を見ても好意に接してくれる人は存在する。

そう信じて今日も、孤独に生きる人に幸せや勇気を与えようと頑張っているのです。

（後書き）

久しぶりの短編です。

一月に書いた前の短編よりもスラスラと、そして、納得するものが書けました。半年って凄いですね！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5654e/>

---

孤独な僕に舞い降りた孤独な神様

2010年12月5日14時42分発行